
拾い物

鼎都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
拾い物

【Nコード】
N7462T

【作者名】
鼎都

【あらすじ】
猫…否。

人間を拾った。

光をそれなりに高い建物で遮られた路地裏で。

子猫のようにちんまりとしているくせに、気性は荒い。

これはそんな俺と、あいつの生活。

初めに

甘々系、大学生×高校生、日常。

キーワード的にはそんな感じです。

気分で作った短篇に近い物語なので、ネタが浮かんだら！という適当さです。

ラスゲとゼロゲはほとんど凍結状態ですね…
ゼロゲは言うまでもなく止まっています…

ラスゲは正直、このCPくつつくか！？と…考えて…あゝ；
やばいなゝと心底反省中にございます。
飽きやすいつてとこが問題ですね。

あと、何の計画もなしに空白のまま書くというのも…

おとなしく学園内で収まっていればよかったのに！…と…；

それではどうぞ！

何の計画もなしにスタートです

…反省してないですね…すみません…

2011・06・01

第一話

「自覚」

それは雨がザーザーとよく降る夜の事だった。
周りは灰色と、闇で包まれ、街灯のわずかな光だけがそこに色を作っていた。

それでもあたりは無彩色のまま。

時折、どこからか帰宅のために通る車のランプや信号の色だけがその空間にあり、普通にあるはずのものでも違和感を示すような空間にしていた。

雨が降っている中、さっさと帰りたいたいという気持ちだけが頭の中にあり、螺旋を描いていた。

近道をして、少しでも時間を短縮させたい、それだけだった。

普段通らないどころか、見向きもしない狭い路地裏を傘をたたんで足早に進んでいた。

入り組んだ路地裏。

光の届かない路地裏。

雨が降る中、建物の屋根がある程度の雨を防いでくれるがそれでも濡れる。

しかし、そんなことはお構いなくどんどん足を進めていった。

そして……

何かに気づく。

あれは何だろうか？

無彩色。

白と黒と灰に染められたこの空間に、何も無いような空間に信号でも車でもない何かの色を感じた。

赤と金。

ミスマッチ……と思いがちだが、これがまた異様に周りと溶け込みお互いに引き立て合っている。

黒に強調され、白の反射に綺麗に映った赤。
その赤の真ん中にある流れる金。

それは、倒れた人間だった。

死体とかだったら正直最悪な話であり、このまま逃げることは可能だろうか？と頭の中に悪が横切る。
面倒なことは関わりたくない。
それに、どうでもいいことだ。

あくまで、そこに横たわっている人間と、その状況に陥った関係者内の問題。
全くの赤の他人である俺にとってどうだっていいことだった。

でも、なぜか。

その異様な光景が、また異様ではないように見せる光景が気になった。

流れる金の髪。

その隙間から見える人間の顔は青白さを見せているが、妙に色っぽかったのだ。

そして、自覚をする。

今まで、20年間女と付き合ったことがない。

告白をされたことがない、告白したがフラれたというわけでもない。

告白は年に4、5回は受けている。

それも全く知らない女性で、年も性格も学校でさえも皆違っていた。

だが、どの女にも興味を示すことができなかった。

恋愛感情はもちろん、友好関係を築こうとしなかった。

ただ適当に回りに群がる人間を適当にあしらって生きていた。

だから、自覚をした。

「俺はホモなのか……」

と。

第二話

「人物」

人間は、何故群れをなすのか。

今まで不思議に思い、けれども結論にまで至ったことはない。

しかし、推測、見当はついている。

寂しいだとか、楽だとか、楽しいだとか、面白いだとか。

人間はその一瞬に何かをいくつも欲していると俺は考える。

自分自身が今、人間が群れることについて結論を求めていることも一つの欲だ。

一人になりたくない。

ハブられたくない。

誰かと違うけど一緒がいい。

自己満足で終わろうと人間の本能は自然とそのままに行動してしまう。

不思議で奇怪なものだ。

されど人間。

俺も人間。

やはり、あれは夢ではなかった。

現在午前7：30。

起床時間であり、俺はソファから降りた。
何故ソファなのか。

理由は簡単過ぎて言うのも怠いくらいに簡単。

例のアレを拾ってきてしまったからだ。

あの路地裏から数百mだったのと、夜だったこともあり人氣がほとんどなく、楽に簡単に運ぶことができた。

アパートに一人暮らしの俺に同居人などの心配はなく、拾った人間の治療と、体を拭くなどして衛生感を保つようにして、ベッドに寝かせた。

もとは黒だったのだろうか、地毛の色は全く見えなくらいに金に染められた彩りよい髪。

多量出血をしたためか青白い肌にとっても映えていて、見た目病人だが、パツと実では妙に色つばさがでており困ったものだと思分に呆れた。

青白い肌。

しかし、顔は紅潮していた。

熱を図ってみれば39。代を示す体温計に壊れたか？と心底驚かされた。

本来ならば病院へ連れていったほうがいいのだろうか、生憎そこまでお人好しではないし、一応相手の事も気遣っている。

明らかに鋭利な刃物で傷つけられた肌を病院のスタッフに晒し、警察に通報され、面倒ごとに巻き込まれるというオチは勘弁でならない。

これが本音という奴だろうか。

でも彼のためでもあるのは確かだ。

彼も通報されて、事情聴取など受けるのは面倒だと思はずだ。

それに見た目からして警察を好き好んで頼ることもしないだろう。

勝手な憶測だが、見た目からしてそうなのだから仕方のないこと。

もし、警察を頼るのであればまず身の格好からして正してからの話になる。

本当にそうだったのなら、受ける話になっただろう。

「先ず起きればやることは一つ。
様子を見に行くこと。」

そして、今の俺に言えること。

「これは俺じゃない」

第三話（前書き）

こちらではお久しぶりです^^。

あう…眠いんです…

梅雨ですね…行動が…

某アニメ&漫画のキャラの属性のように…雨によって鎮静されてお
ります；

ただ、日常はとっても暑い日というかムシムシとして嫌気が刺さ
れます。

雨は好きなのに…

それではどうぞ…

第三話

「猫は可愛い」

ある意味、とても危険な状況だと思う。

綺麗。

可愛い。

色気が最高。

妖艶。

さらりと流れるくせに人工の色で染められた髪はその顔にあっており、顔は顔で十分整っていると思う。

年齢を推測…しなくてもすぐに分かった。

学ラン。

中学生か高校生か？

身分証明書。

〇〇高等学校 2年4組24番

野中悠

近所では有名な不良校。
絶えず怒声が響くという。

「野中ねえ… 下の名前… ユウ？ハルカ？」

残念なことにふりがなはなかった。
でもおそらく、男につける名前だろうからユウと読むのが妥当だろう。

顔を真っ青にして、気絶したまま眠っているユウという人物を一瞥し、静かにため息をついた。

理性というものを抑えるのがこんなにも大変だとは思わなかったからである。

顔が真っ青であるからより引き立っているのか、紅より薄い桃より濃い唇に引き寄せられる。

結構重傷だと、自分でも思う。

ただ、怪我しているところをたまたま見つけ、治療の為に家に連れ帰り、通報は面倒そうだからそのままにしているだけであって… 下心はない…… とはいきれない。

「早く、目覚めろし」

血は、見ただけでも人が騒ぎ立てそうだが、おそらく、昨日の雨で

流れていることだろう。

もしかしたら、この者を運んだがために血が道に道筋を描いたかもしれないがこれも雨で流れているだろうということにしておく。

しかし、今日が日曜日で本当によかった。

でなければ、大学生である自分は講義にでなければならぬし、39度も熱を出している人物を家に放置しなければならない。

まったくの赤の他人が家にいて、何かされるかもしれないという考えは特にもたない。

理由は単純明快。

家には何も置いていない。

あるといえば家電くらいだ。

特に重要な書類だとかデータだとか金銭関連のものだとかはまったくない。

それは大抵、自分が持っているカバンに入っているため持っていけるようなことはひったくりでもない限りないだろう。

にしても、日曜日の朝だというのに…

否。日曜日の朝だからこそか、

「暇だ」

いつもならば昼近くまでダラダラとパソコンを弄ったり、レポート

などの作成に集中しているのだが、今日ばかりは何もできなかった。

パソコンを弄っていてもいいのだが、いつこの目の前の人物が起きるかも分からない。

ああ、一個だけあるか。

久しぶりに……

「まともな飯作るか」

ただ、アレが食べれるかどうかは放置だが。

第三話（後書き）

何か主人公いい加減www

多分こいつはO型だな！とか勝手な予測を立てちゃう鼎都です…

べ、別にO型の皆様が雑多！とか大雑把！とか言ってるわけじゃないですからね！？

自分もO型ですけどね！確かにその通りなのですがね・・・

つまりは主人公は思いつきり私の…正確が出ているということ…？
になるんですかね？あははは；

では、また次回、気分とネタが浮かびましたら更新しますので！

第四話（前書き）

久しぶりの更新です。
今はもう、あれです。
偽りに没頭です。

ではどうぞ

第四話

「覚醒」

それは別段、起きるのが嫌というような起こし方ではなく。
寧ろ、起こすという行為ではなく。

ただ単純な行動。それ故の覚醒。

漂う香り。

花などの柔らかい芳香ではない。
アロマやキャンドルといったものでもない。

ただ、慌しい音、豪快なものの匂い。

それは、料理。

「ん…あ？」

静かに目を開けた。

ぼんやりとした視界は白く、普段見る色とは違っていた。

そして、明かり。人工ではなく自然の。

窓から差し込む、太陽による光、日差し。

白いカーテンをすり抜け入ってくる光が眩しく思わず目を瞑る。

次第にはつきりと見えてくる視界に写された光景は、殺風景ながらも殺風景らしく白を貴重とされた空間が落ち着きを見せていて、安心感を覚えた。

眩しくて瞑った光にも慣れ、柔らかな日差しへと変わる。

ベッドはベッドで大きいけどシンプルで、白と黒。

敷き布団から、掛け布団、枕までが白で、土台、ベッド自身が黒である。

スタンドの棚は木。

部屋の隅に申し訳程度に置かれた観葉植物。

匂いと音を除けばとても静寂で包まれた部屋だと思う。

また、安心感を覚えるが、結局かまったく知らない場所で、出てくる言葉は…

「此処は何処だ？」

である。

だが、思いも寄らないことが起きた。

「俺の寝室」

独り言でボソリと呟いたその言葉に、まさか返答があるとは思わなかったのだ。

ベッドを占領していたその少年は酷く驚き、誰もが見て分かるように肩をビクツ！とさせた。

「そんなに驚くな。飯作っただが、食べれるか？因みに味は保証しない。不味かったら食べなければいい。自分で作れるのなら勝手に作ってくれても構わない。後片付けはしておく」

見知らぬ男が淡々とした口調で、顔の皺一つ動かさず無表情で言う。ただ、その男が危険人物ではないことと、助けてくれたという事実は確かなようで、素直に「食べる」と答える。

すると、男の顔が一瞬ふつと緩み小さな笑みを浮かべた気がした。

きよとんとしていると、男が「食べないのか？」と行動を促す。慌ててベッドから降りようとすれば、ズキンと激痛が体を駆け巡り一番痛みが集中する腹を抑えてベッドの端に座り込む。

「急に動くな。自分が怪我人ということも忘れていたのか？腹をぶっ刺されている。あまり無理をするな」

男の言葉に言葉をぶつけて返したいが腹に激痛が走る今は言葉を発しようにも声すら出ない。

「こっちに持つてくるか？」

激痛に身を震わす少年に少しもの気遣いか、男は少年に問う。他人の家でそこまで迷惑をかけるわけにもいかない、というある程度の常識を持つ少年は首を横にふり、俯き加減によたと覚束ない足取りで男の方へと歩いていく。

男はその様子を静かに見守りつつ、傍で万が一に備えていた。

テーブルには、彩りは悪いものの見た目は悪くない料理がならんでいた。

「ほら。箸、スプーン、フォーク。適当に食べ」

「……………あり、がと」

「どついたしました」

初めて発し、初めて聞いた声。
多少掠れたものはつきりと聞こえ、返事を返す男。

そして、二人は「いただきます」と静かに言々と黙々と食事をした。

その間に会話は無い。

箸、スプーン、フォークを皿にぶつけカツン、カチンといった音だけだった。

第四話（後書き）

んー

静かだな…

静かだ…

え、この子たちくつつくん？

みんなそうですよ…

鼎都の作品って全部B Lなんですけど「これって問題あり？」、なかなかくつつかないんですよね；

まあ、ひつつかせますよ。

片一方ツンデレかもしれませんけどw

無口俺様気味×ツンデレ気味、フラグ！！！！！

ではまた、いつか会いましょう♪

第五話（前書き）

お久しぶりです。

2ヶ月以上更新されてませんでした。はい。

あははははは；

最近・・・変態ちつくなりまして・・・えー

皆から「変態！」

はい。

俺は

「変態ですよ」

と返してます。

認めるといつか、自分でもそう思ってますし・・・結構楽しくや
てるんです。

変態で。笑

第五話

己」

「自

「ごちそうさまでした」

「お粗末様」

静かな食事が終わり、後片付けをする俺は、チラリと少年を一瞥しまた視線を戻す。

その外見と裏腹に礼儀正しい姿勢と、食事の食べ方、そして挨拶。

一体どこをどう間違っただんな髪になったのか。
全くもって不思議である。

それよりも気になるのは目だ。

金髪は人工。

しかし、目は違うであろう。

カラーコンタクトならば、起きてすぐに痛いと訴え外すはずである。

だが、彼は普通に起き、普通に立ち、普通に食事をした。
つまりは、あの目は人工のものではなく自然のものであるということ。

「その目は本物か？」

ためしに聞いた。

ただの興味の範囲。

「これ・・・は、本物・・・です」

急な質問でか、一瞬ビクリと肩を震わせ驚きを見せた。

また一瞥すれば灰色の目は怯えたように揺れ泳いでいた。

恐怖か、畏怖か。

信用ならない相手と考え、警戒しているのか。

その様子が、拾ってきた野良猫のようだった。

「お前を拾ったのは興味だ。あとは気になったから。俺がお人よしというわけではない。むしろ面倒ごとは確実に無視する。拾われて迷惑だと思ふなら今すぐ帰ってもらってもかまわない。まだここにいたいならば好きにいてかまわない。俺は迷惑ではない。分かったか？」

「・・・・・・・・」

無言。

それでも意思表示か、こくりとうなずく。

彼の胸に秘めているものが何なのか俺にはわからない。

だが、最低限俺の興味の範囲でできることはしてやろうと思う。

俺の興味と気分次第。

つまりは、飽きればそこで終了でもある。

「俺は・・・野中悠　のなか　ゆう　と言います。暫く・・・お邪魔させていただきます。家事なら・・・できるんでお願いします」

「そ。俺は梶宿竜　かじひろ　りゅう　。大に通ってる」

「俺は...。校に通ってます」

「今日日曜だが、どうする？明日の学校」

「・・・暫くは・・・通えないので・・・ここにいます」

「そうか。俺は普通に大学あるから、いないけど、好きに覚え。その辺のもの。料理が好きなら料理作ってもいい。PCだつて勝手に使ってもらつてかまわない。自己負担でDVDでも借りてきて適当に見てても構わない」

「あ、ありがとうございます」

今までの会話で一番表情が豊かだった。

喜びに溢れる、少々でも確かな笑顔。

認めたくは無いが、それらの行動、言動に惹かれる俺に正直、嫌気をさした。

今の時点では堪えられる。

されど、本当に本気で好きになってしまい、己自身寡欲ではあるが欲を求めてしまったとなれば関係は終わりだろう。

その前に追い出すしかない。

「全く・・・この俺が他人のために・・・」

小言をもらすも、彼には聞こえてないようでさっさと後片付けを済ませた。

会話の無いままに、一日は過ぎる。

というのも、彼、悠が何も発さずただただぼうつとリビングのソファに座り何かしら考えているのかそれともただ単にそこに座っているだけなのか天井を仰ぎ見て固まっている。

すでに、大学の課題などを済ませてしまった俺にとっては不気味な存在であり暇である。

連れ出すにも、彼自身が外に行くことを拒否しそうで何もできない。

さて何をしようかと思ったとき、何かが鳴った。

それは着信音だった。

俺のものではなく、悠の。

「・・・・・・・・すみません」

ソファから降り、玄関の狭い空間へと場所を移す悠。
その顔には恐怖と怯えという暗い色しか伺えなかった。

数分したところに悠は戻ってきた。

何を話していたのかは全く分からない。

そこまで干渉する気は全く起こらない。

しかし、それでもやはり、悠の顔色は気になる。

もともと怪我人ということもあり顔が青白いことはあったがそれ以上
に真っ青にしている。

「何かあったか」

「・・・あの・・・話を聞いていただけますか？」

何かを思いつめた顔。

自分に溜め込み、他人に迷惑をかけないタイプだろう。

それでも、何かにすぐる気持ちで言っただと俺は思う。

長く深い。

そして不快。

悠は淡々と、話し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7462t/>

拾い物

2011年10月6日13時57分発行